



島田修三氏の講演 けやきホールで

卯の花の里だより 佐佐木信綱資料館の一年間について報告する。昨秋、市制55周年記念行事の一環として、また信綱先生創刊の歌誌「心の花」百年の長寿を祝い短歌中心の文化講演会が盛大に催されたことは、林課長の巻頭言に詳しい。恒例の特別展は「佐佐木信綱の生涯とその業績」と題し、先生九十二年の生涯を視覚的に位置づけた。とり

わけ先年、鎌倉の佐々木ひさ夫人から寄贈された秘蔵の写真類の逸品は、多くの参観者の足をとめた。また、書簡集「寸錦帖」から何点かの手紙や断簡類を展示したが、未公開であった「松花和歌集」切れ(解説、三重大学・廣岡義隆教授)が中日新聞に報道されるや、

これを知られた国際基督教大学の福田秀一氏が来館され、その文献学的価値を立証された。村田邦夫氏によると福田氏は、佐々木一族の国文学者で昭和45年12月、記念館(今の生家)の開館に当り、市が招いて信綱宝蔵の「耕雲千首」について講話されたゆかりの人でもあった。

この年、地味ではあるが当館のささやかな歩みの跡をふり返ってみたい。土地の人々にも親しみやすいミニ情報紙「うのはな」の刊行や館内の壁面を飾る小・中学生の短歌作品の展示は、より一層信綱資料館を地元付近かなものとさせた。これらのことは、今年度の来館者増にもつながりはっきり数字的にも示されている。

いま、待望久しかった「館案内」新訂版や「館収蔵品図録」の編集が、記念館並びに教育委員会によって進められていることも落すことはできない。

また、今年度は、信綱作詞「夏は来ぬ」にまつわる話題がいくつかあった。作曲者小山作之助氏の故郷、新潟県大潟町と信綱のふるさと鈴鹿市が、この名曲の発表一〇〇年を機に固く結ばれたこと。市在住の塩川弥一郎氏夫妻の念願による歌碑が六月一日(日)市立図書館の一隅に建立されたこと。その日、読売新聞「日曜版」を開くと、紙面いっぱい「うた物語ー唱歌・童謡」の見出しに、白ヌキで「夏は来ぬ」の文字が大きくおどっているのを見て、あまりの偶然に驚いたことを今も思い出す。

最後に、今年は特に当館の資料を研究して公刊された労作が多い。「歌人山下陸奥伝」・塩野崎宏氏、「野村望東尼獄中記・夢かぞへ」・小河扶希子氏、「文学館探索」榎原浩氏など。そして、教育委員会編の「鈴鹿市の文化財」が刊行されたことを付記してこの稿を終えたい。(編)



目次	
市制55周年記念行事をふりかえって	林 銀 哉
展示室だより	注 正
信綱一首・12	村 田 邦 夫
卯の花の里だより	編 集 机

市制55周年記念行事をふりかえって

林 銀 哉

平成九年は、鈴鹿市の市制施行55周年に当たります。その記念行事の企画は、すでに前年度に決定しておりました。私の担当する教育委員会文化財保護課では、本市の生んだ学者で歌人の佐佐木信綱翁が創刊された、歌誌「心の花」の一〇〇年を迎えることを祝い、短歌中心の文化講演会になっていました。

講師には、信綱先生のお孫さんで早稲田大学教授・歌人の幸綱先生と、大阪



講演の佐佐木幸綱氏

大学名誉教授で万葉集の研究・普及に名名の高い犬養孝先生から快諾をいただき準備を進めてきました。あれは六月の初めだったかと思いますが、高齢の犬養先生が急な病いに倒れられ、ご講演がむずかしくなり一時は途方に暮れてしまいました。幸い常時ご指導を仰いでいる三重大学教授・廣岡義隆先生のご助力により、愛知淑徳短期大学教授で歌人の島田修三先生を紹介していただき、ご承諾いただいた時は、ほんとうにホッといたしました。晩秋の十一月三十日、鈴鹿市文化会館、好天に恵まれたこの日、一人でも多くの聴衆のお出でを祈るのみでした。午前の顕彰歌会は盛会で幸綱先生の熱気あふれる批評会に続き、午後は会場をけやきホールに移し、華々しく講演会の開催となったのです。

あの大きな五百人ホールも満席に近く、その盛況ぶりに私も関係者一同、胸をなでおろしました。幸綱先生は、祖父信綱翁の短歌の中から雲を題材とした二十四首を中心に「信綱の世界」を私などにも興味深く語られました。島田先生は、「心の花の歌人たち」と題し、

創刊号から五年間ほどの同誌に名が見える初期の歌人たちのこと、根岸派、明星派とも交流して和歌革新運動の気運を興しことをよくわかるように話して下さいました。

会場で集めたアンケートの回収率も高く、内容もまじめで、今後の企画にも大変参考になることが多く、さらに、来館者年齢は十代から八十代に及んだこと、また市内、県内はもちろん、名古屋・岐阜・愛知県をはじめ、遠くは千葉・東京方面からも数多くお越しいただいたことに、責任者の一人として心から感激した次第でした。

今、あの日のことを思い出したとき、私のこれまでの人生にとって最高の経験をさせていただいた一日いや一年であったことを記してペンをおきます。

(文化財保護課長・兼任佐佐木信綱記念館長)

展示室だより 部屋を入ると、右側の壁面に見事な筆跡で書かれた大きな掛軸(縦二三センチメートル・横一二センチメートル)が目につく。「弘綱教誡文章」と題された18行に及ぶ立派なもの。終りに明治十七年十月廿七日とあるが、この年は信綱が13才で東京帝大古典科国書課の一年生、次男昌綱は8才であった。父弘綱は時に57才で、かねてからの持病もあり二人の子どもの将来を案じて遺したものであろうか。

「人間は誰しも富貴を願うものである。ところが富を得、身分も高くなると、さらに欲深くなり世人の反感を買うの

が常である。だからといって、余りにも身すばらしく貧しいと、他人に馬鹿にされる。人間の一生というのは天地の意志によって動く。人生は有限である、あまり自分を苦しめず、あくせくせず、各自の本分に励みつつ、調和のとれた趣味を持ち、心豊かな生活をしなさい。自分の本業を怠らず、その上で精神的な楽しみを忘れないよう生きてくださいなさい。」といった要旨で、「世の中は楽しきものをここからくるしむべしとおもふなりけり」と結んでいる。

趣味は具体的に、花鳥風月・読書・作文・詠歌・管弦・謡曲・仕舞・弓・鞠・茶香道・囲碁将棋まで、まさに往くとして可ならざるはなしの感がある。弘綱翁の通人ぶりは館に遺るいくつもの文献類によって明らかであるが、このことは紙面の都合で後日にゆずりたい。ただ、信綱の生きかたをみたとき、教誡文を反面教師としたのではないかと思うほどで、また、この貴重な遺品が弟昌綱の嗣子、印東弘玄氏から館に寄贈されたことも理由のないことではあるまい。なぜか、そこに父弘綱の深い配慮があったのではないかと考えられる。

弘綱教誡文章

(文化財保護課 辻 正)



弘綱が教誡文章

人に貴きあり、賤しきあり。富(め)るあり、貧しきあり。賤しきは貴きをねがひ、貧しきは富(め)るを羨むは、世の常也。願ふべからず、うらやむべからず。貴き人は、思はずに、世の恨(み)をおひて、おほやけばらた、しかるべし。富(め)る人は、積(み)たる宝を長く子孫に伝へむと、有(あ)るが上にもふくつけくなりて、人に憎(にく)まるべし。さればとて、あまりに身のいふかひなく、ひとにあなづらる、も、又世にふるたつきなく、朝夕の艱難(げんなん)なる物もわびしき物もかひなく、羨(うらや)みても心にまかせず。されば、願はず、羨(うらや)まず、おのおの我(が)身(み)のすくせある事をさとりて、其(の)日の事なく過(と)ぎ(ぎ)行(ぎ)事(じ)を樂(たの)しむべく、悦(よろこ)ぶべき也。人生(じんせい)纒(むす)かに五十年、長くとも七八十にあるは、いと稀(まれ)也。らんかし。さのみ心を苦しめずして、身を保ち、長命(ながいこと)をこそ願ふべく、羨(うらや)むべけれ。長命(ながいこと)の樂(たの)しむを得んには、遙(とほ)なる蓬(よもぎ)が島(しま)をあざりて、仙丹(せんたん)を得るにあらす。居(ゐ)ながらにして、得(え)らるべし。其(の)藥(くすり)と友(とも)は花(はな)・杜宇(とこ)・月(つき)・雪(ゆき)・讀書(とくしょ)・作文(ぶんぶん)・詠歌(えいか)・管弦(くわんげん)・舞(まい)・弓(ゆみ)・鞠(まり)・茶(ち)・香(か)・將棋(しょうぎ)など、おのがじしの好(この)むまにまに得(え)べきなり。是もあまりにふけりては、中(な)々に、心を苦しむる。媒(まへ)ともなるべければ、よきほどにとちめ、あながちに、人に競(か)ひ、わざもたけて、ほこらんとは思ふべからず。さる心(こころ)しらしひしたる人は、おのづから風韻(ふういん)ありて、さのみ、つたなからぬ物也。さて、かくいへる人は、各(おの)づから業(わざ)あり。「そを打(うち)捨(す)て」て長命(ながいこと)の樂(たの)しむべし。朝夕(あすけ)のいとま又休(やす)みなどに、若(わか)き人はあしき遊興(あそび)にふけり、酒色(しゅしき)におほれて、あたら命(いのち)をちぢめ、老(おい)したる人は生涯(じやうがい)に譲(や)らず、人にゆだねずして、みづから身をいたつき、心をくるしむるがたははらいたくて、いへる也。あはれ、老(おい)も若(わか)きも、ゆくりなく命(いのち)終(お)りなるとすとき、常(とこ)に、かの長命(ながいこと)の樂(たの)しむるをよきに思(おも)ひて、晝夜(ひつや)心をやすむるいとまもなく、徒(ただ)にしなん事を悔(く)ゆとも、いか、かひなからむ。な忘(わす)れそや、身の業(わざ)。な忘(わす)れそや、心の樂(たの)しむ(しみ)。

明治十七年十月廿七日

竹柏園主人

源の弘綱識

源之

和魂漢才

信綱一首・12

花さきみのらむは知らずいづくしみ
なほもちいつく夢の木実を

歌誌「短歌研究」昭和38年3月号所載

この総合誌が全冊を信綱系歌人特集に当てた時の巻頭歌。時年九十二と自署しているから、その死に先立つ十か月前の発表ゆえ歌集にはない。みのある・木実、いづくしむ・もちいつく、とこの人の根底にある旧派的詠歌の骨法など超越して天衣無縫、初句二句の破調も朗々高吟するにふさわしく、しかも、爽やかに傷らぬ老いの哀感が薫る。まことに、長者の風ある絶唱。(村田邦夫)